

曙を呼び覚ます：神の派遣する慈しみとまことの循環の中で

この詩では嘆きの歌 (2-7 節) と感謝と賛美の歌 (8-12 節) が一つになっている。嘆きの歌は感謝と賛美の歌と共に、感謝と賛美の歌は嘆きの歌と共に歌われるのだろう。後半部分は詩編 108:2-6) に再録されている。(ヴァイサー) 頭書には「滅ぼさないでください」に合わせて。ダビデの詩。ミクタム。ダビデがサウルを逃れて洞窟にいたとき。とある。四面楚歌、「憐れんで下さい」と叫ぶ信仰者の祈りは切実であり、この歌においても神の「慈しみとまこと」(4 節、11 節) が信仰者の頼りである。該当の出来事が、ダビデがサウルに追われ、エン・ゲディ (死海の西岸で、岩山が多く、「山羊の岩」や「羊の囲い場」と呼ばれる洞窟があった) の洞窟に逃れていた時、サウルの三千の兵に取り囲まれた時のことであれば、サムエル記上 24 章の物語に詳細が語られている。58 編、59 編、75 編にも登場する「滅ぼさないでください」という曲はどのような曲想であったのだろうか？この詩もまた、ダビデ自身の歴史的な文脈を念頭におきながら、それに拘らないスタンスで読むことにしよう。「洞窟」は古代から人が外敵を避けて、あるいは俗世間から離れて籠った場所である。カッパドキアの地下都市を見たことがあるが、洞窟は人目につかない逃れの場ではあるが、もし見つかったら逃げ場のない窮地でもある。壕に潜んでいた日本人をあたかも虫を焼き殺すように火炎放射器を用いて殺す米軍の写真を見た時にショックであった。あるいは追い詰められ、手榴弾で自爆する悲劇も忘れてはならない。戦争は敵味方を問わず惨たらしいものである。信仰者はどのような曙(夜明け)を呼び覚まそうとするのだろうか？！

1. わたしを憐れんで下さい、神よ、わたしを憐れんでください

第一行目は「憐れんでください/神よ、わたしを憐れんでください」(hännênî 'elôhîm, hännênî) であるが、これは 56:2 (hännênî 'elôhîm, hānan 神よ、わたしを憐れんで下さい) にもう一つ「憐れんで下さい」を付加したもので、心からの叫びを印象の深いものにしていく。伝統的な礼拝における毎週繰り返される「キリエ、エレイソン」(新生讃美歌 239 番 通常「キリエ、エレイソン」は十字架の贖いと結びついているが、この讃美歌では復活と関連づけられている) と「あなたの罪は赦された」という応答の伝統を思い起こす。「憐れみ・恵み深さ」とは自然の因果関係、人の善悪の応報を「超えた」ものなのであり、勧善懲悪ではなく、神のまさに恵み・憐れみ、過剰な包み込む愛である。

2. 神のみ翼の陰に

詩編 17:8 「瞳のようにわたしを守り/あなたの翼の陰に隠してください」も印象的であるが、母鳥？が拡げる翼の陰にひな鳥が匿われるという隠喩は旧新約聖書に見られるものである。窮地に陥る信仰者は神を避難所とする (信頼する *bākā hāsāyāh napšī, my soul trusts in you, Qal Perf.*)。わたしはあなたのみ翼 (複数) のかげを避難所とするであろう。(ehseh, Qal Future, hāsāh 避難所に向かって逃げる) 「信頼する」と「避難所にする」が同じ「ハーサー」というヘブライ語であることは興味深い。「災い (hawwōwt NRSV the destroying storms) の過ぎ去るまで」とあるように、神の慈しみとまことはどこしえに続くが、災いは過ぎ去る！また過保護を避けて、あくまで、災いが過ぎ去るまでである。私たちはだれに信頼し、だれを避けどころにしているかを問われている。56 編 3 節にも「高くいます方よ」という呼びかけがあるが、57 編 3 節でも「いと高き神を呼びます」とあり、二つの詞が似ていることが分

かる。神は「天」におられるゆえに地にいる私たちを助けることができる。神は詩人のためにすべてのことを成し遂げてくださる方である。

3. 慈しみとまことを遣わして下さい

彼の「慈しみ（ヘセド）」(hasdōw) と彼の「真実（アーマン）」(wa'āmittōw) を天から派遣してくださいという祈りも詩編で度々登場する。(詩編 42:9、43 編 3)。11 節にもこのセットが現れる。「あなたの慈しみは大きく、天に満ち/あなたのまことは大きく、雲を覆います」。直訳は「なぜなら、あなたの慈しみは諸々の天にまで届き、あなたの真実は雲まで届く」。4 節では慈しみとまことを派遣して下さいと言い、11 節ではその派遣された慈しみとまことが地で働きをなし、今度は、天まで、雲まで広がり、届くという。4 節では、慈しみとまことが「わたしを踏みにじる者の嘲りから救ってください」と祈られるが、10 節ではその結果、救いを経験し、諸国の中で、信仰者は神の慈しみとまことに感謝し、賛美すると言う。「慈しみ」「まこと」は「ことば」や「知恵」と共にやがて「位格化」されて、イエス・キリストとしてこの世界に派遣される。イザヤ 55:10-11 を思い起させる。「雨も雪も、ひとたび天から降れば/むなしく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ/種蒔く人には種を与え/食べる人には糧を与える。そのように、わたしの口からでるわたしの言葉も/むなしくは、わたしのもに帰らない。それはわたしの望むことを成し遂げ/わたしが与えた使命を必ず果たす。」

6 節と 12 節はリフレインとして挿入され、「神よ、天の上に高くいまし、栄光を全地に輝かせてください」と歌う。Be thou exalted, O God, above the heavens, Led the glory be above all the earth.

4. 窮地にいることを神に訴える

詩人は彼の困難を神に訴える。「災い」に囲まれている (2 節後半)、「踏みにじる者の嘲りに囲まれている (4 節)、獲物を狙う獅子のような人たち、火を吐く (人を傷つける言葉? 鋭い剣を持つ?) 戦士たちに囲まれている (5 節)。あるいは敵が獅子に譬えられ、彼らの歯は槍や弓のようであり、彼らの舌は鋭い剣のようであるということか? 「網」が目の前に仕掛けられ。「落とし穴」が掘られている (7 節)。

しかし、信仰者や神が手を出さず、網を仕掛け、落とし穴を掘ったその人たちがそれらに捕らわれる。「慈しみ」と「まこと」を送って下さいという祈りは信仰者が力によって応報・復讐しないように護ってくださいという祈りなのかもしれない。

5. 心を確かにする

適する者たちや災いに囲まれても、信仰者は、心を確かにする (nākōwn, Niphal 受動態、Part. Kōwn, 固める、形作る、準備する、Niphal は確立される)。「確立される、わたしの心は、神よ。確立される、わたしの心は」という技巧を凝らした句で、「確立される」が印象付けられている。賛美の歌を歌うことができる。

6. 曙を呼び覚まそう

暗い夜はやがて明ける。窮地にある信仰者も闇の中で夜明けを迎える。むしろ、希望、感謝、賛美をもって「曙を呼び覚ます」働きを信仰者は期待される。コロナパンデミックと人間の劣化の後、自然破

壊と気候変動の世界の後、どのような世界を呼び覚まそうとしているのだろうか？ それに先立ち、信
仰者たちは今、「目を覚まして」いなければならない。神に栄光が帰され、「慈しみとまこと」それに、
ここには登場しないが義（ツェデク）と審判（ミシュパート）が確立され、暴力と策略ではなく、神の
シャロームが支配する世界を呼び覚ます必要がある。We shall overcome!

教会は「み国を来らせたまえ、み心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」と祈ると共に、復活の
証人として、救いの完成を「先取」する者として、世界のただ中で、曙を呼び覚ます感謝と賛美の礼拝
を捧げる。堅琴、琴の音色が曙を呼び覚ます。